

2011年3月20日（日）男山教会朝拝説教

コリントの信徒への手紙2、1章12～23節「人間の計画と神の真実」

主題；キリストの「然り」によって立つ

1、震災

父なる神と御子イエス・キリストの恵みと平和が豊かにありますよう。アーメン。

東日本の太平洋沿岸にほとんど壊滅的ともいえる被害を与えた大地震から今日で十日目を迎えました。地震直後の日曜日となりました先週の礼拝では、祈禱奉仕グループの導きによって特別の祈りの時を持ちました。また最初の祈禱会となりました16日の祈禱会では、いつもの聖書研究を取りやめまして、大会の執事活動委員会がとりまとめてくださった東北関東の教会の状況についての情報をもとにして集中的に祈りを捧げました。神様、助けてくださいと祈りました。

このような大災害のときに、現地から離れたところにいる私たちがまずなすべきことは限られています。しかしまず祈ることです。祈ることはすぐ直ちに出来ることです。祈禱会で続けて読んでおりますヤコブの手紙の5章13節にはこう書かれています。

「13 あなたがたの中で苦しんでいる人は、祈りなさい。」苦しいときにこそ祈るのです。それから目に見える行動を起こしたいものです。

しかし祈る前にもなすべきことがあると聖書は記しています。旧約聖書の哀歌3章には26節から28節には、こうあります。

「26 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。3:27 若いときに軛を負った人は、幸いを得る。3:28 軛を負わされたなら／黙して、独り座っているがよい。」

まず黙って、事柄を受け止めると言うことがあり、それから祈りへ、そして行動へと進んでゆくのです。先週月曜日に、大会の議長書記団の代表と大会執事活動委員会は、東京に集まり緊急の会議をもってくださいました。阪神大震災のときに現地対策本部員として働かれた鳥井一夫先生も陪席されたと伺いました。そして、まず人々の助けをいのりながら、被害を受けておられる教会を助ける具体的な手立てをとることを緊急に決めてくださいました。追って、わたしたちの教会でも救援の募金に取り組むこととなります。どうぞそれぞれが心に決めて通りに奉げてくださって、教会以外にはどこにも助けがない現地の教会のために心を尽くしたいものです。

2、神の然りによって

さて、ただ今、コリントの信徒への手紙2、1章12節から23節の御言葉を聞きました。ご一緒に聴きました今朝の御言葉の中に繰り返し示されている言葉がありますけれどもその中の一つは、「然り」という言葉です。17節から20節に6回繰り返されています。これは、平たく言えば「はい」、「そうです」と言う言葉です。英語で言えば「イエス」と言う言葉です。イエス・ノーのイエスです。その中で19節と20節にまたがっている御言葉をもう一度聴きましょう。

「神の子イエス・キリストは、「然り」と同時に「否」となったような方ではありません。この方においては「然り」だけが実現したのです。20 神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。」

目に見える出来事、この世界で起きている悲しいことや苦しいことだけを見るならば、わたしたちは、とうてい神様の愛と真実を受け入れることが出来ない、そういう時があるのだと思います。けれども、そのときにこそ、哀歌に示されているように、わたしたちは口を閉じる、心の中

の様々な思い、さざ波を一切消す、黙って静まって待つ時を持つと言うのです。そして改めて目を凝らすのです。そのようにして混乱や不条理の中にも必ず見えて来る「神の然り」に目を向けよと言うのです。困難の中に何かが見えるはずで、希望を見る、光を見よと言うのです。そして祈れと言うのです。また、それは反対側から言うことも出来ます。「主イエス様によって祈る、その御名によって祈ることによって、やがて「神様の然り」が見えて来る、分かるようになるということでもあります。実は、この神様の「然り」ということについて、わたしたちは、これは、いつでも、ここに留めておくべきことではないでしょうか。ルカによる福音書の10章には、よきサマリヤ人のたとえと名づけられている主イエス様の教えがあります。この御言葉の最後には、こう記されています。「あなたも行って同じようにしなさい」

追いはぎに襲われて死にそうになっている人のそばを通りかかったサマリヤ人は、この災害の意味は何かとか、神様は何を考えておられるのかというようなことをまったく言っておりません。そんなことは考えていないのです。そうではなく、すぐに為すべきことをしたのです。受け止め、祈り、出来ることをする、これが「神の然り」によってわたしたちがなすべきことです。

3、訪問延期の理由

この新共同訳聖書では、今朝の御言葉の前に「コリント訪問の延期」という小見出しがつけられています。そのことを分かりやすくするために、先週の週報には12節から22節までと予告していましたが今朝はそれを変更して23節までをお読みしたのです。23節をもう一度お読みします。

「1:23 神を証人に立てて、命にかけて誓いますが、わたしがまだコリントに行かずにいるのは、あなたがたへの思いやりからです。」

パウロが、コリント教会を訪問すると約束していながら、それを取り消し、予定の時になっても一向に姿を見せないことに対して、コリントの教会は不信感を募らせていたようです。それに対してパウロは、訪問を延期したことについて、それには理由があるのだと言っています。それはあなた方のことを思っていることだと言っています。この後を読み進めてゆきますと分かることですが、パウロはどうやら、訪問の代わりに手紙を書いたようです。ゆく約束をしていたけれども、その後に伝わってくる教会のありさまを聞くにつけて、訪問ではなくて、手紙を書くことにしたようなのです。そして、この手紙は涙ながらに書いたと説明されているように、相当激しい手紙であったことがうかがえます。そして、この手紙によって悔い改める人が現れ、コリント教会の様子はだいぶ改善したのです。そこでパウロは、この手紙では、今度こそ訪ねてゆきますと手紙を書いているのです。

この手紙の12章14節にはこうあります。「私はそちらに三度目の訪問をしようと準備している」。だから、備えて欲しい、重ねてわたしの思いを受け止めて欲しいと言うのです。

確かにパウロは訪問の約束を破ったのです。わたくしも牧師として、男山教会で働きながら、あらかじめ約束したうえで他の教会を訪ねることがあります。わたしたちの教会にも、10月に二週間滞在したいとチェ先生が連絡してきています。これが延期になったからと言って、教会が動揺するというものではありません。しかし、わたくしのような現代の牧師と違って、当時のパウロの立場は、特別のものでした。パウロは使徒であります。つまり主イエス様の直弟子である12使徒と同じ権威を持つものとして、主イエス様から直接に初代教会に遣わされたものです。天に

帰って行かれた主イエス様の全権大使としての権威をイエス様ご自身から与えられ、不思議なしるし、奇蹟を行う権能をも与えられていました。初代教会では使徒が訪問するということは特別のことです。特にコリントの教会にとってパウロは、創立の功労者であるばかりか、今でも特別の責任を負っているのです。コリントの教会では、そのような特別の使徒であるパウロの訪問が取り消されたことに対して、動揺が起きたようです。

当時のコリントの教会は、見た目には人が集まり、盛大な礼拝が捧げられていました。しかし、その霊的な命は実は風前のともしびでした。人間的には祝福されているように見えても神様から見れば問題だらけの教会であり、瀕死の状態だったのです。つまりこの教会には倫理的退廃や霊的熱狂主義がはびこっていたのです。さらに会員相互の愛が見失しなわれていたのです。そのことはコリントの信徒への手紙1によって明らかであります。

訪問の延期によってパウロの教えを守り霊的な意味で教会をたてなおそうとしていた信徒たちは、がっかりして力を失ったでしょう。それに対して、奢り高ぶっていた信徒たちはますます勢いづいたかもしれません。「だから言ったではないか」、「パウロと言う人は本当の使徒ではない」、「わたしたちは別の人についてゆこう」と言い出す人も現れてきました。けれども、パウロは、自分が訪問を取り消したことは、神様の前に決して恥ずべきことではないとここで断言します。

17節 18節の御言葉をお読みします。

「17 このような計画を立てたのは、軽はずみだったでしょうか。それとも、わたしが計画するのは、人間的な考えによることで、わたしにとって「然り、然り」が同時に「否、否」となるのでしょうか。」

1:18 神は真実な方です。だから、あなたがたに向けたわたしたちの言葉は、「然り」であると同時に「否」であるというものではありません。」

パウロは、最初第二次伝道旅行に際して、コリントからマケドニアにゆき、またコリントに帰って、そこからエルサレムを訪ねたいと思っていました。これは経済的な困窮に陥っていたエルサレム教会を助ける募金のことも関係していました。しかし、パウロはすぐにこれを行わずに、エフェソに長く滞在しました。

このことは決して「然り」と「否」とを同時に言うような不誠実なものではなかったとパウロは言うのです。パウロは、絶えず、主イエスの真実に従って行動したからです。人間の計画には変更が伴います。しかし、この変更にあたって、わたしたちがいつも心に留めておくべきことは、神の真実と言うことなのです。言い換えると、その計画変更があとになって顧みた時に、非難されるようなものではないということが大切なのです。なぜならば、主イエス様のご生涯と御言葉は、変わらないもの、真実であるものだからです。

4、神にあって誇り合う関係

わたしたちは、教会の中や外で、いろいろな人々と人間関係を結んでいます。あるときには、その関係がおかしくなるということがあります。深い傷を負わされたと感じて、許せないと思うことがあります。あるいは、何か引け目や負い目を感じてしまうので近づきたくなくなるということもあるかもしれません。パウロとコリントの関係は、このとき確かに悪化していました。パウロは、コリントの教会を支配しようとしているのではないか、あるいは、パウロは信用できない人間だ、まさにただの人間であり、主イエス様から権威を受けている使徒とは思えない、様々な悪評が伝えられました。

しかし、この手紙を読んで分かることは、コリントの信徒たちに対して、わたしは、もう関係を絶ちたいと言うような思いはパウロの側には、少しもないということです。あなたがたを誇りに思っています、あなた方にはいろいろな問題があっても、しかし、主イエス・キリストはあなた方を決して見捨てることはありません、キリストがあなた方を支えている、とパウロは、繰り返し語っています。人間は罪の内において、問題を起こします。けれども神さまの方は、たとえそのようなものでも、その人が確かに悔い改めて信仰の道にすでに入っている限りは決して見捨てることはありません。主イエス様の十字架による罪の贖いは決して変わることはないのです。

パウロは、「主イエスの来られる日に」と言っています。これは「最終的に」、「最後には」と言うことと等しいことです。また「神様の前には」ということと同じことでもあります。あなた方は私の誇りです。こういうのです。そしてあなた方にとっても、わたしは誇りとなるような存在であり、このことを確信しているというのです。主イエス様が、真実である方であるので、パウロもそう言うのです。

キリスト者同志の関係だけが赦される特権があります。それは、同じ価値基準をもち、同じ恵みの中にあると言うことです。絶えず立ち返るべき共通の物差しを持っているということです。それは、主イエス・キリストと言うものさしです。価値基準です。共に悔い改め、共に祈ることが出来るのはキリスト者同志の間に固有のことです。共に神をたたえることが出来るのです。

18節から22節までに「わたしたち」と言う言葉が、7回使われています。そのうちの3回、つまり21節と22節の「わたしたち」は、パウロの側だけでなく、コリントの教会員たちとパウロとを合わせて呼ぶ言葉となっています。神が、「わたしたちに」油を注いで下さったとパウロは言います。神が「わたしたちに」証印を押して下さったとも言います。コリントの教会員とパウロとは、一つの証印を受けた間柄であり、一つの油注ぎを受けた間柄なのです。さらには、一つの霊を与えられた間柄なのです。

使徒であるパウロは、本来は、もっと権威のある存在として命令口調で語ってもよい立場にありました。しかし、ここではそのような上下の関係で語っているところは見えません。そうではなく、同じキリストにある兄弟としていっそう親密な親しい関係を強調しています。確かに、上下の関係があったとしても、しかし、まことの権威者である主イエス・キリスト、あるいは神様の前では、同じ立場にあるものなのです。これは当時のパウロの使徒としての優位な立場を放棄するような驚くべき言葉です。

パウロは、使徒であっても、ひとりの信仰者です。これは確かなことだったのです。パウロでさえこう言うのですから、ましてや現代の牧師や長老と教会員の関係は、同じ信仰者として神様の前にどちらかが霊的な優位性を持つような関係には決してなりえません。もちろんイエス・キリストから託された職務の中で牧師や長老は与えられた務めを致しますが、そこには霊的な意味での上下の関係はありません。

誰もが、同じ父・子・御霊の三位一体の名による洗礼を受けて、十字架と復活のイエス様に結ばれたものです。誰もが、死んでよみがえった主イエス様と同じように、罪に死んで新しい命に生き始めたものです。油を注がれた、つまり霊的な意味でこの世で神様に従って生きるという新しい任務を与えられたものです。証印を押すと言うのは、シールを張る、封印を張ると訳す事も出来る言葉です。この人はもう救われた、新しい人になった、神様のものになったというハンコ

を神様から押しもらったのです。そして、聖霊を与えられています。22節では、聖霊こそ、新しい命の保証だと書かれています。

私たちが、未だ地上におりながら、しかし天のみくにの住人のようにかみさまから扱っていただくことが出来るのは、すでに前渡し金としての聖霊を受けているからです。聖霊の神様は、もちろん目に見えません。霊的なご存在ですので、触れることも肉体において感じることもできません。けれども、神様を信じ、主イエス様を信じる信仰を与えられているのは、この聖霊の神様によるのです。同じ恵みを受けている、これがパウロとコリントの教会員たちを結びつけ、互いに愛し合うことが出来る根拠なのです。

同じ教会の兄弟姉妹、あるいは教会は違っても同じ教派教団の兄弟姉妹、さらに教派教団が違っても、同じ主イエス・キリストを信じる兄弟姉妹は、このような関係の中に置かれています。もちろん、それは神様が下さる具体的な出会いの中で培われ実を結ぶものですから、空想的な意味で無理に兄弟姉妹の関係を無理やりに持って愛し合えと言ってもできません。時間をかけて培う信頼関係が必要です。しかし、パウロとコリントの教会員たちの間には、すでにそのような関係があったのです。

5、誇りをもって

パウロは、人々から誤解を受けるようなことがあったとしても、決して、駆け引きとか、あるいは、人間的な利害損得によって行動したのではないと明言しました。パウロはそのことを自分の良心にかけて誇りとするといいます。主イエス・キリストが真実な救い主であり、絶えず「神様の然り」によってご生涯を全うされたように、パウロ自身もコリントの教会に対する愛を持って、一貫して行動した死、これからもそうするというのです。

わたしたちの周囲の人々、信仰を持っている人との関係であろうが、そうでない人との関係であろうが、いつも振り返って恥じない、一貫した基準によって私たちは言葉を語り、行動することが求められますし、そうであるなら、最後は神様がその関係を祝福して下さるに違いありません。そして、とりわけ同じ信仰を持つ兄弟姉妹の間においてこそ、そのことが求められるのです。それが神様の然りによって生きる恵みなのであります。祈りを致します。